opusdei.org

## Ratzinger 枢機卿の 説教

ヨハネ・パウロ2世教皇の葬 儀ミサで

2005/04/12

「わたしに従いなさい」、復活された主は、ご自分の羊を飼わせるためにペトロを選び、ご自分の最後の言葉として、こうおっしゃいました。キリストの「わたしに従いなさい」というこの断定的な言葉は、わたしたちが心から愛するヨハネ・パウロ2世教皇の生涯が残したメッセージ

を理解するための鍵であると考えられます。今日わたしたちは悲しみに打ちひしがれながらも、よろこばしい希望と深い感謝の心で、教皇様のご遺体を、不死の種として、地に埋葬します。

キリストにおける兄弟姉妹たちよ、 わたし達はこのような心と精神で、 ここ数日、沈黙のうちに祈る大群衆 に埋め尽くされた聖ペトロ広場や隣 接する街路やローマの様々な場所に 集っています。すべての人々に心か らご挨拶を申し上げます。枢機卿団 を代表して、各国からお集まりにく ださった国家元首と政府高官、各国 代表の皆様方、諸教会とキリスト共 同体、各宗教の代表の皆様に挨拶を 送ります。諸大陸から来られた大司 教と司教、司祭、修道者、そして信 者の皆さん、特に、教皇様が教会の 未来であり希望である若者たちに挨 拶を送ります。わたしはまた世界各 地でラジオやテレビを通して私たち

と心を一つにして、愛するヨハネ・パウロ2世教皇との荘厳な別離の典礼に参加している人々にご挨拶を申しあげます。

「わたしに従いなさい」。若い頃のカロル・ボイティワは文学と演劇と詩に夢中になっていました。そして、ナチの恐怖に取り巻かれ脅されながら化学工場で働いていた時、

「わたしに従いなさい」という主の 御声を聞いたのです。このように特 殊な状況の中で、哲学書と神学書を 読み始め、後に、サピーエーニャ枢 機卿が設立した非合法の地下神学校 に入学します。戦後、クラコビアの ヤジェロニカ大学神学部で残りの勉 強を終えることができました。司祭 に宛てた手紙や自伝的な書物の中 で、1946年に叙階された司祭職につ いて、頻繁に触れておられます。教 皇様の言葉には司祭職に関する考え が示されていますが、特に主の三つ の言葉を中心にしておられます。最

初の言葉は、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと」(ヨハネ15,16)、第二は、「良い羊飼いは羊のためにもあなたがたを愛してる」(ヨハネ10,11)、そして最後は、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛していった。わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ15,9)。

ちなさい、さあ行きましょう」と 言っておられます。また、パパ様は 最後まで司祭でした。教会に仕える ために日々自らを奉献されたからで あり、また特に、最後の数ヶ月の辛 い試みを通して、自分の命を羊と人 間家族全体のために神に捧げたから です。こうして、キリストとひとつ になり、羊を愛する良い羊飼いに なったのです。そして、第三の言葉 である、「わたしの愛にとどまりな さい」。教皇様はすべての人との出 会いをお求めになりました。すべて の人を許すことができ、すべての人 に心を開いた教皇様は、今日、わた したちに主の言葉を繰り返しておら れます。「キリストの愛にとどま り、キリストの学び舎で、ほんとう に愛するわざを学びましょう」と。

「わたしに従いなさい」。1958年7月、主とともに、その御跡に従う若い司祭・カロル・ボイティワにとって、新たな歩みが始まります。いつ

ものようにカロルは、熱狂的にカ ヌーを愛する若者たちとマスリ湖へ 行って休暇を過ごしていました。し かし、ポーランドの首座大司教・ビ シンスキー枢機卿のもとへ行くよう にという手紙を携えていました。面 会の理由は予想できました。クラコ ビアの補佐司教に任命されるという ことだったのです。わたしたちの存 在のキリスト教的解釈を世界中に広 めるための大学教授職を捨て、若者 たちとの良い刺激に満ちた交流をあ きらめ、人間の神秘を知り解釈する 知的な論争を後にすること、これら すべては自らを見失うこと、あの若 い司祭の人間としてのアイデンティ ティーそのものを失うように思えた ことでしょう。「わたしに従いなさ い。| カロル・ボイティワは、教会 の呼びかけの中に、キリストの御声 を聞き、それを受け入れました。こ うして、「自分の命を救いたいと思 う者は、それを失うが、わたしのた めに命を失う者は、それを得る(ル

カ17,33) | という主の言葉がいかに 真実であるかを知ったのです。誰も が知っているように、教皇様が自分 の命を救おう、自分のためにとって おこう、とされたことは一度もあり ません。最後の瞬間まで、余すとこ ろなくすべてを、キリストとわたし たちのために捧げてくださいまし た。その結果、主の御手に委ねた事 柄すべてが、新たなかたちでご自分 のものとなりました。言葉と詩と文 学への愛は、教皇様の羊飼いとして の使命の本質的な部分になっていま す。特に、福音の告知が正に逆らい のしるしであるとき、福音を告げる こと自体に、新たなさわやかさと現 実性、新たな魅力を与えることにな りました。

「わたしに従いなさい」。1978年10月、ボイティワ枢機卿はふたたび主の御声を耳にしました。ミサの福音朗読に出てくる主とペトロの会話が繰り返されます。「ヨハネの子シモ

ン、わたしを愛しているか。わたし の羊を飼いなさい|「カロル、わた しを愛しているか という主の問い かけに、クラコビアの枢機卿は心の 底から「主よ、あなたはなにもかも ご存じです。わたしがあなたを愛し ていることを、あなたは知っておら れます」と答えました。キリストへ の愛こそ、私たちが敬愛する教皇様 の力そのものでした。パパ様が祈る 様子、説教する時の様子を見た人 は、よく知っています。このよう に、キリストに深く根を下ろし繋 がっていたおかげで、単なる人間の 力を遥かに超える重責、キリストの 羊の群れ・普遍教会の羊飼いとして の重責を果たすことができました。 今は、この教皇様の様々な分野にお ける功績について触れることはでき ません。

本日の典礼から、中心となる要素の 二つを読んでみたいと思います。聖 ペトロの第一の手紙、ここで教皇様 はペトロと共にこう言われます。

「神は人を分け隔てなさらないこと が、よく分りました。どんな国の人 でも、神を畏れて正しいことを行う 人は、神によって受け入れられるの です。神がイエス・キリストによっ て平和を告げ知らせて、イスラエル の子らに送ってくださった言葉を、 あなたがたもご存じでしょう」(使 徒言行録10、34-36)。第二朗読 で、聖パウロは、そして帰天した教 皇様は聖パウロ共に、力強くこう勧 めています。「したがって、わたし の喜びであり冠である愛する兄弟た ちよ、しっかりと主に留まりなさ い、愛する者たちよ」(フィリッピ 4.1)

「わたしに従いなさい」。羊たちを飼いなさいという命令と共に、キリストはペトロにその殉教を告げます。それは、普遍的な羊飼いとしての役割と愛に関する会話の結論と言えます。さらに、主は最後の晩餐に

おけるもう一つの会話を思い起こさ せ、「わたしの行くところにあなた たちが来ることはできない」と言わ れました。「主よ、どこへ行かれる のですかしと尋ねたペトロに、イエ スはお答えになります。「わたしの 行く所に、今あなたはついて来るこ とはできないが、<後で>ついて来 ることになる」。イエスは最後の晩 餐から十字架と復活へと赴かれ、過 ぎ越しの神秘にお入りになります。 しかし、ペトロはまだついて行くこ とができません。そして、復活の後 にその時、すなわち「後で」の時が 訪れます。ペトロはキリストの羊を 飼い、過ぎ越しの神秘に分け入り、 十字架と復活へと向かいます。主は こう言われます。「あなたは、若い ときは、… 行きたいところへ行って いた。しかし、年をとると、両手を 伸ばして、他の人に帯を締められ、 行きたくないところ連れて行かれ る | (ヨハネ21,18)。教皇座登位当 初は、パパ様も若くて力に溢れたと

きで、キリストの導きに従って世界の隅々にまで行かれました。しかし、これの後は日増しにキリストの後は日増しにます「他が本しい。」という言葉があるとを理解していた。ますというであるとを理解しなもせずによって、変れをものともはないます。というです。を告げ知らせ、ますないです。

であり、罪からも多彩な善を手に入れる」と書いておられます。このような見方に励まされた教皇様は、キリストと共に、苦しみと愛を共有しました。それゆえ、苦しみと沈黙に関するそのメッセージは、まことに雄弁であり、豊かな実を結んだのです。

神の慈しみ。教皇様は神の慈しみの もっとも純粋な反映(姿)を神の御 母のうちに見つけました。若い頃に 母を失ったパパ様は神の御母を自分 の母以上に愛しました。十字架上の 主の言葉を、自らに向けられた言葉 として受け取ったのです。「みなさ い。あなたの母です」。主に愛され た弟子と同じように、自らの存在の 奥に聖母を受け入れました。Totus tuus(トトゥス・トゥース、全て貴 方のもの)。そして、その御母か ら、主と一つになることを学んだの です。

わたしたちはだれ一人として、教皇 様の生涯最後の復活の日曜日を忘れ ることはできません。教皇様は苦し みに刻み込まれた姿をバチカン宮殿 の窓から現して、最後の「ウルビ・ エト・オルビーローマと世界中のた めの祝福をお与えになりました。愛 する教皇様は、確かに今、御父のお 住まいの窓から私たちに目を注いで 祝福してくださっています。教皇 様、どうかわたしたちを祝福してく ださい。日々あなたを導き、今は 主・御子イエス・キリストの栄光に あなたを導く、神の御母・あなたの 母に、愛すべきパパ様の魂を委ねま す。アーメン。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ ratzinger-shu-ji-qing-noshuo-jiao/ (2025/12/15)